



鵜坂神社の基礎を開いた おおひこのみこと 北陸将軍大彦命のこと

第8代孝元天皇の皇子。第10代崇神天皇の時、古代日本連合国建設と大和朝廷の基盤成立と拡大をはかるために設立されたのが、山陰、山陽、東海、北陸の四道将軍で、その内の一人で、北陸を担当したのが、この大彦命です。若狭（福井県）の郷で屈強の浜子10人を得て、舟にのって、今の岩瀬辺りに上陸、

呉羽丘陵をつたって、荒地山（八尾町）まで、軍を進め伊豆部山（八尾・桐谷・夫婦山）のふもとに本営を置いたといわれます。

大彦命は、進んだ中央文化と武力と政治感覚を背景に、民情視察、開拓指導をしながら、大和朝廷のイメージアップを図り、その支配下におさめていったようです。山また山に囲まれる、きびしい自然環境の越中は、熊野神社などにみられるように、海上ルートによって進出してきた出雲の色あいの強い文化が広がっていったものと想像されます。

そこへ、高天原の大和政権勢力がおよんできたわけです。こうした実情から「人心掌握」の手だての一つに「神」がありました。恐らくこの頃は、神々の系図の完成にあと一步のところでしたので大彦命のもたらした神は、高天原系の神々の中でも、あまり耳なれぬ神々が多かったように思われます。それをまた押しつけるのではなく、その土地の民意に沿うように、すでに祀られている神々を再評価したりしながら、無理のない、土着のイデオロギーの中に、高天原系の神々を導入し、形をととのえていったのが、平安初期にまとめられた「延喜式」に登載されてくる、鵜坂、杉原、速星、熊野の四社であると考えられます。

当然、「式内社」というには、大和朝廷とも関係を持ちながら、神威も高く、これをまつる部族勢力も強大であったればこそと思われれます。その布石を大彦命によってなされたといっても過言ではないと思います。ちなみに、こうした朝廷つまり天皇の歴史がはっきり見えはじめるのはずいぶんあとのことで、33代推古天皇（在位592～628）のころになります。

鵜坂神社の祭神を例にとって大彦命の人心掌握の仕方を述べてみますと、鵜坂神社に既に祀られ、土地の人々から崇敬されていた、姉比咩、妻比咩の両神の親として、面足、惶根両神を祀ることで、夫婦、親子とのつながりから、生産、豊穰の神威を大きく出させたものと考えられます。

特に両神とも女神であることから、成長、結婚、お産、そして女体の神秘性を考え合わせて、婦中町の各社の中でも一歩抜きん出た社格で伝承させるようにしたものと考えられます。

「鵜坂河」を渡った

おおとものやかもち

万葉の歌人大伴家持のこと

古代国家建設と天皇制確立という、大きな歴史の流転の中で、大伴氏はとくに672年の壬申^{じんしん}の乱に武名をあげ、律令国家の忠実な官僚としての地位を築いた武門であることを自認する部族団結意識のつよい一族でありました。武人でありかつ文人であった大伴^{たびと}旅人(665~731)の53才の時、その第二夫人との間に家持が生まれました。

少年時代は(727~730)九州大宰府^{だざい}ですが、少年時代は(727~730)九州大宰府^{だざい}です。この頃から歌の勉強をはじめたよう

です。京にもどると、すぐ父と死別しています。その時家持13才、朝廷では743年、大佛建立の詔を出し、その財源のねん出を地方に命じます。国をあげて、東大寺、大佛建立にあおられます。

その財源確保のための税金のとり立て、労力の提供等大変なものであったと思われます。

そんな折、天平18年(746)29才の家持が、越中守を拝し、伏木の越中国府に若い赴任となりました。単身赴任のさびしさをまぎらわすための方策だったかも知れませんが、万葉集の編纂に力を注ぎました。この頃の越中は河川が多い為、まだ開拓なかばの状態でありました。国が田地などの多少によって、ランク付けされた「大・上・中・小」のうち、上の国の部にランクされるのは800年すぎの頃でした。

天平勝宝3年(751)5年の任期を終えて、小納言となって帰京します。翌752年ついに大仏開眼、その後、家持は色々の官を歴任しましたが、757年彼のもっとも良い庇護者、理解者で万葉集編纂の協力者でもあった「橘諸兄^{たちばなもろえ}」がなくなります。

橘諸兄の死は、中央政界のバランスを崩し、為に政治事件が相次ぎ、家持自信どちらかと言えば、政治に向かないタイプでした。それが知らず知らずにドロ沼の中に入り込まざるを得なくなっていました。

家持はこの事件後67才で(785年)病死したのですが、事件に激怒した天皇は、家持を張本人として遺骨のまま官位剥奪、彼の息子共々隠岐島に流罪とし、一族も大量処刑されたといひます。

天皇は晩年、大伴一族のために名誉回復措置をとります。よって細々ながら、大伴氏が立ちなおり、流罪になった大伴国道の子が、伴大納言にまで出世しますが、866年応天門の放火犯となり、大伴一族ことごとく絶えてしまいました。

“仏の徳兵衛”こと岡崎徳兵衛家

歴代、富山藩の十村役に

婦中町鵜坂の西本郷。奈良時代の天平20年(748)ごろ、当時、越中の国司だった大伴家持が馬で渡り「鵜坂川 渡る瀬多み 此のあが馬のあがきの水に衣ぬれにけり」と詠んだこの鵜坂地区。天平の昔をとどめる面影も無いのが当然だろうが井田川にかかる売比(めひ)川橋のたもとに、天正10年(1582)から約400年間も続いた岡崎徳兵衛家の広大な屋敷跡は、新しい住宅団地と化し、多くの人に移り住んで昔日の面影はない。

“仏の徳兵衛”。かつての地元では、岡崎家をこう呼んだ。

<川原の開拓でクワに当たって死んだへびのためにへび塚を造った徳兵衛は、ある時、子供たちが捕えているマス(へびの化身)を買い取って神通川に放してやった。そのへびはやがて徳兵衛の召使



いになり、よく働き、そのため徳兵衛の田畑は次第に増えた。そして徳兵衛の嫁となり、身ごもるが、産屋（うぶや）を見られたためへびに戻り、鱗（うろこ）形の護札を残して姿を消す。しかし、間もなく大きな木が流れつき、徳兵衛はその木で立派な家を建て、それから徳兵衛の家はますます栄えた。> = 婦中町に残る伝説から =。この伝説の主人公は、岡崎家中興の祖の徳兵衛である。大蛇（じゃ）伝説のパターンは各地にみられるが、この伝説は、神通川と井田川の洪水のはさみ討ちと闘い、開拓したり、水田を守ったり、あるいは水の恩恵によって栄えてきた岡崎徳兵衛家の歴史の側面を物語る。

しかも「丸に鱗」の家紋は、この伝説を象徴している。

岡崎家の先祖は升形城（魚津）の城主。岡崎四郎義村といわれる。江戸時代は十村役（大庄屋）を歴代勤め、農民と藩との間に立って藩全体の農政に大きく関わってきた。また明治に入ってからも代議士として、あるいは漢詩人として活躍した藍田翁。東北大学教授文学博士で中国史家として有名な文夫氏。約400年続いた元の家、屋敷は無くなっても、これら岡崎家の血は今日も多彩に脈打っている。「見よまいか 見まいか 見よまいか 島の徳兵衛の嫁 見まいか お椽（えん）に七さお座敷に八さお 椽の出端に九さお」 -。サンサイ踊りに歌われた岡崎徳兵衛の栄華の夢の跡の鵜坂地区の西本郷。かつては見渡す限り美田の中だった。約一万平方メートルもある屋敷の周囲には塀があり、神通、井田川の堰（せき）を落とせば、浮き城ともなることから富山藩の隠し砦（とりで）ではなかったかといわれる岡崎家。農民であっても名字、帯刀を許され、屋敷には馬場、矢場もあった。庭には松の大樹があり、モミジの名所でもあって、富山藩主もしばしばここを訪れている。明治時代は梧竹鳴鶴、天来などの文人墨客の憩いの場ともなり、庭の池の洗硯池では濫觴（らんしょう）の故事にならって酒もくみ交わされた。さらに井田川に舟を浮かべ、宴を張ることもあったという。明治43年6月19日、当時、国民党総裁だった犬養木堂が同家を訪れた時の園遊会には、県内の知名士、文化人ら百人が招かれたという。

鵜坂地区は、神通川と井田川が入り乱れ、この万葉のふるさととも、岡崎家中興の祖徳兵衛が住みついたところはアシの草原。三代目までにこの荒野を開拓、千石（約66ヘクタール）の美田に変えた。

時代は変わって昭和20年の敗戦一農地解放までその約千石の持ち高は増えもせず、減りもせず、代々受け継がれて来た。このような豪農、大地主は県内でも珍しい。

富山藩の最大の農民一揆（き）といわれる文化10年（1813）の一揆では、悪徳地主や商人の多くがバンドリを着た農民に夜襲をかけられ、打ち壊しにあっているが、岡崎家は少しも被害を受けていない。また天保7年（1836）翌8年の大ききんの時には、米蔵を開け、おかゆを炊き出し、富山城下からもそれをもらいに列ができたとさえ伝えられる。大洪水による被害、凶作の時には年貢の減免に農民側に立って藩を説得した岡崎家の人たちが多いとされる。

「人徳第一、これが岡崎家の家訓だったようだ。だから、小さい時は自分でお金を払うこともさせられなかった。ゼニ勘定させればいやしい人間になるとでも考えられていたようだ」

現在の岡崎家は富山市五艘にある。富山大学付属小学校のすぐ近くのひっそりとしたたたずまい。

前当主故卯一氏は、富山県考古学会幹事として埋蔵文化財の保護、発掘に活躍した。父親文夫氏の後を継いで京都大学史学科を出て、同大学付属の東方文化研究所の助手を勤めていたが、敗戦が卯一氏の人生を大きく変えてしまった。食糧難のために郷里に帰り、自ら耕作した。

しかし、小さい時から学者の子として育てられた卯一氏の肉体は、重労働についてゆけなかった。

そして学校の教師としての生活。昭和33年には婦中町西本郷の家、屋敷を人手に渡して現在の五艘に転居した。富山藩時代に岡崎家がゆるぎない勢力を持っていた理由の一つに、同じく御扶持十村を勤めた高安家（富山市布瀬）との複雑にからみ合った濃い血縁関係があげられる。徳兵衛の孫さわ（高安家13代松次郎の娘）は富山藩主前田利隆（4代目）のタネを宿し、側室として御殿入りすることになっていたが、婿を取って高安家を継いでいる。利隆の落胤（らくいん）の松太郎は25才で早死にしたが、その妻は徳兵衛の娘たみで、松太郎の死後、富山藩士に嫁いでいる。

2代藩主正甫のとき、高安家の屋敷内に建てられた菅神祠の“おたまや”には歴代藩主の位牌（いはい）が安置されていたが、大正3年の大洪水のあと、西本郷の旧岡崎邸に移されていた。

しかし、岡崎邸も昭和32年には取り壊され、“おたまや”は現在、富山藩主の菩提(ぼだい)寺の大法寺(富山市梅沢町)境内に建っている。明治からの岡崎家は中国文化研究家として3代にわたっている。明治の最後の漢詩人であり、南画家であった藍田翁。中国の代表的南画家・呉昌碩の為書の絵がある。藍田翁は欧米文化に批判的で中国の文化に心酔。呉昌碩など中国の文人とも親交が深かった。大正15年には息子の文夫氏と中国を旅行。紀行詩画集「燕鳥越鴻」を残している。

この藍田翁の中国文化研究所の夢を実現したのは文夫氏といえよう。文夫氏は四高、京大と進み、哲学者西田幾多郎の門下生。大正8年から三年間中国に留学、14年にフランス、イギリスにも留学した。昭和10年文学博士となり、24年の定年退官まで東北大学教授を勤めた。

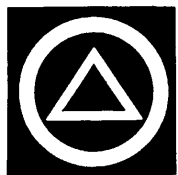
著書には「魏晋南北朝通史」「南北朝に於ける経済制度」「古代支那史要」「江南文化発達史」「司馬遷」「支那史学思想の発達」など8冊がある。文夫氏は特に南北朝を中心とする中国史の権威だった。

卯一氏ももともと中国史の研究家。「出来ることなら中国の埋蔵文化財発掘に協力してみたい」と夢を抱いていた。新版「婦中町史」の監修者でもあった。

(追記)

岡崎家の由来

岡崎徳兵衛の先祖は升形城(魚津市松倉)の城主岡崎四郎義村とされる。「加越能三州地理志稿」や享和3年(1803)に書かれた「前田家(富山藩)文書」によると、四郎義村が升形城に拠(よ)ったのは室町時代初期の応永2年(1395)6月2日。その子孫が歴代、四郎義村を名乗っていたが、戦国時代の天正年間(1573年以降)に上杉謙信に攻め落とされ、そのときの城主義村の末っ子が逃げのび、魚津に流浪。その後宮ヶ島(婦中町)に移り住み、帰農したことになる。



同家には武将などが戦場を持ち歩いたミニ厨子(ずし)に入った念持仏(高さ3センチ)が保存されていた。このように、県内でも由緒の古い岡崎家であるが、その系図は、大正3年の洪水で流失。くわしいことはわかりにくい。しかし、現在保存されている重要な1枚文書は、県内でも貴重な古文書の一つ。

岡崎家の家紋

佐々成政の禁制をはじめ慶長5年(1600)の開拓許可状や前田利常の藍印状など20通が、帰農した岡崎家の開拓の歴史を証明している。

成政越中入りしたころは、すでに岡崎家は名主(みょうしゅ)層になっていた。成政の禁制「一、濫妨狼藉事 一、放火事 一、不謂儀申懸事 右条々堅令停止訖若於違犯輩可処嚴科者也」(暴力や放火、無理難題を仕掛ける者は厳罪に処する)の日付けは天正10年(1582)6月24日。成政、利家、勝家の連合軍が魚津城攻めで上杉勢を破ったのは同年6月3日。それから1カ月もたたないうちに書かれているわけで、この禁制からも、もともと上杉にうらみを持つ岡崎家が成政の入国に協力、既得権を確保したとみられる。成政が去り、前田家の支配になっても、大庄屋クラスの十村肝煎(とむらきもいり)に任命され、富山藩時代は歴代十村役を勤めた。なかでも十村最高職の御扶持人十村を勤めた者が多く、富山藩の農政に尽くしている。家紋は丸に鱗(うろこ)

うさかサンサイおどり

(1)

おどるまいか 見まいか おどるまいか 見まいか
島の徳ベえの 嫁見まいか

嫁見りやなんじゃ 嫁見りやなんじゃ
目こそへがなれ きりょうよし

きりょうがよいとて 根性がしりょうか
鷓坂^{たいこ}太鼓のばいで つらばかり

島の徳ベえの土用ぼし見まいか
おいに七^{しちさお}棹 座敷に八^{やさお}棹
縁^{えん}の出口に 九^{ここのさお}の棹
サーイ、サンサイ ヨンサノ ヨイヤナー

(2)

むかしむかしのことなが だれど
しちべたたいて まいったと

氏子にくうて たたいたがでないが
無事にいい子が生まれよう

鷓坂の神様 女の女神
氏子かわいと 見てござる

稲の穂にホラ また穂がさいて
でっかい米ぐら いくつでもたてて
でかなれようなれ 子どんたち
サーイ、サンサイ ヨンサノ ヨイヤナー

(4)

小さい子供に 花がさ きせて
きせて ながめりゃ あいらしや

七夕さまよ 七夕さまよ
書いて流され 天の川

おどりみにきて おどらぬものは
あしにたんこべ できてくれ

小さい子供に 花がさきせて
さきい たたせて あとから見れば
いちゃけ残らず 愛らしや
サーイ、サンサイ ヨンサノ ヨイヤナー

(5)

盆がちこなる こんやが焼^やける
盆のかたびら 白^{しろ}できた

おらのあんまに ジョーセン買うてもろて
どこでなめよか ぺらぺらと

盆の十六日 おしょうらい しょうらい
しょうらい まかのうて 日が暮^くれた

東たんぼに 光るもんな なんじゃ
虫か蛸か こがねの虫か
虫でないもんな 火の玉じゃ
サーイ、サンサイ ヨンサノ ヨイヤナー

(3)

たべて mirarema すしの^{なえすぎ}苗杉
 笹のはっぱに ^{つつ}包まれた

こんな んまいもんあるかいと
 みやげにだいたが はじめやと

神通川にも 井田の川にも
 アユがとれりゃ マスもおる

^{やかもち}家持ハンも鶏がいをしたと
 いまじゃ したても鶏も おらん
 昔のすがたが なつかしい
 サイ、サンサイ ヨンサノ ヨイヤナー

(6)

おらっちゃ ちっちゃいときや 起き上がりこぼし
 寝たり起きたり ころんだり

わたしのせどに みょうがと ふきと
 みょうが めでたや ふきはんじょう

るすごとせまいか るすごとせまいか
 あづきごとにて だごせまいか

おらっちゃみてきた 安田の山で
 猫が米かち ねずみがおどる
 てんと いたちが かいにくる
 サイ、サンサイ ヨンサノ ヨイヤナー

轡田村開拓の祖

^{くつわだ さ えもんじょう}

轡田佐衛門尉と紫雲山浄福寺

戦国時代の末期（16世紀後半）越後の上杉謙信が越中に攻め入り、越中勢力が、これに対抗していた頃、浜街道の防備の

かなめとして大村城（現、富山市海岸通り57）が築かれ、ここにたてこもったのが、^{くつわだぶんごのかみただまさ}轡田豊後守雅正であった。轡田氏は大村城に1万石を領して在城し、日方江館にその家老が3000石を領して住み、ここを本拠として、東岩瀬、新庄、水橋などを勢力下においていました。岩瀬や水橋は、古くから街道沿いの渡し場が存在したことで知られ、そこにある城館はこの渡し場を掌握することによって、神通川や常願寺川を含む北陸交通を支配、規制してきました。

従って、轡田氏は大村城城主であると同時に新庄城の城主でもありました。しかし、轡田氏に関する確実な史料は極めて少ない、半面、伝承がいくつか残されています。一つに「飛びだ

んご」の伝説があります。この浜街道路に出没する魔物を「越中五大将」大村城跡の一人と呼ばれた豊後守が、団子の力で退治したというのであります。また日方江の「そうけ塚」というのは、上杉謙信が大村城を攻める時に築いた高台の跡だと言われています。これは当時、上杉方が村の者に、「そうけ一杯、銭何文」と金を与えて、土砂を運ばせて築いたものだといわれています。

謙信は、ここから大村城を見下ろして、轡田氏を破って能登に向かったと伝えられています。

天正6年（1578）上杉方の武将河田豊前が大村城に攻め入り、^{ただまさ}雅正は討死しました。今、富山市海岸通り地内の瑞円寺境内に「精霊塚」があります。ここが雅正の墓所であるといわれています。

付近からは遺品とみられる刀などが出土したり、城の抜穴の跡らしきものも見つかっています。

^{ちな}因みに、轡田村の地名の起こりとなった轡田佐衛門尉は郡誌にあるように「威望四隣を押し、他士の当地を侵略するものなき・・・」程の勢力だったことがうなづけるし、左衛門尉とは豊後守と同一



大村城跡

人物なのか、またその先祖なのか明らかではありませんが^{ゆうせん}轡田氏が轡田村の開拓の先祖であることは明らかだと思います。また下轡田の紫雲山浄福寺の開基祐専は轡田豊後守の長男であったといういつたえや、同寺に残る陣鐘も轡田氏が、陣中において使用したものに間違いのないのではないかと思われます。

たけうち や いちろう
竹内弥一郎
鵜坂村下轡田



安政 5 年 (1858) 4 月 5 日 竹内七郎の長男として生まれた。
若くして村内の納税のとりまとめや紛争の調停・解決に当るなど常に村内の指導的役割を果たしてきた。

明治 22 年 (1889) 町村制実施とともに、鵜坂村初代村長に就任した。時に若冠 31 才の若さであった。30 年、34 年、38 年夫々村長に再選され、通算 15 年間村長の職にありまた。

村会議員は 22 年以來ずっと連続就任してきた。

明治 40 年には郡会議員に選ばれた後、名誉職郡参事会員ともなり郡政に参与してきた。学務委員、県農会議員、郡農会議員、所得税調査委員、信用組合幹事、神通川左岸第 7 区水害予防委員、共益無尽会社取締役等々の要職を歴任、その間の功績は極めて大きく一々列挙の違がない程である。

明治 22 年の鵜坂村誕生と同時に下轡田の近知小学校、分田の博隆小学校を合併して、新しく鵜坂小学校を発足させ、直ちに新校舎の建設にかかり、教育の向上と同時に、産業の発展にも苦慮し、新鵜坂村の村づくりの第一歩を踏み出させ、村政の基盤を作ったことは極めて大きいといえる。 昭和 14 年 11 月 26 日没 享年 81 才

ほんなみけい た ろう
本波慶太郎

鵜坂村分田 慶応元年 (1865) 8 月 4 日 ~ 昭和 4 年 (1929) 3 月 享年 64 才



生まれは下新川郡浦山村浦山である。

若くして農学に志し、明治 18 年石川県農事講習所を卒業し、下新川郡や婦負郡で奉職した。明治 20 年農務局蚕業試験場に入り、明治 36 年婦負郡書記となり、当時婦負郡鵜坂村分田にあった県立農事試験場の場長に就任、農業の巡回教師、産業技師として、農事改良普及業務に専念した。

住居も農事試験場内に移し、献身的に婦負郡一帯の農業の改良、産業の開発に貢献した。大正 9 年退職、鵜坂村を第 2 の故郷として後進の指導に当った。大正 11 年、地元住民衆望を担って鵜坂村長に就任、その職にあること 6 ケ年、鵜坂村産業組合長も兼ね、行政面から農業振興の指導に当った。また県社鵜坂神社の新築に建設実行委員長として成功に導いた。また大正 12 年以來、神通川改修工業の促進にかかわり、左岸工事と共に合口用水問題に東奔西走して、その成果を挙げた。又公設消防を始めて組織し、村会の協賛を得て、社会の安寧秩序を保持し、福利増進を図るなど、近世の先覚でその功績は枚挙に遑なき程である。

殊に帝国農会法が制定されると共に、明治 33 年 4 月、婦負郡農会を創立し、その幹事の重職に就

き、爾来大正 9 年まで満 19 ケ年その責務を全うした。その功により大日本農会から緑白綬有功章を贈られた。大正 3 年以來約 20 年間、清和報徳社の副社長として社務を指導し大正 12 年以來 6 ケ年、鵜坂村産業組合長として、鋭意組合の発展向上に尽瘁してきた。

また婦負郡南部農業倉庫の創立に努力してきた。

私生活では、敬虚な仏教徒であり、眞宗本派を信仰し、趣味は園芸と報徳主義の研究玩味という。

たかやなぎとめじろう

高柳留次郎 鵜坂村塚原

明治 7 年 (1874) 10 月 20 日 ~ 昭和 5 年 (1930) 11 月 8 日

高柳治一郎・ハルの二男として生まれる。鵜坂村村会議員から村の収入役・助役となり明治 42 年鵜坂村村長に推され、大正 11 年まで 13 年間、村政の要として、身命を賭して、村の興隆発展に尽くした。

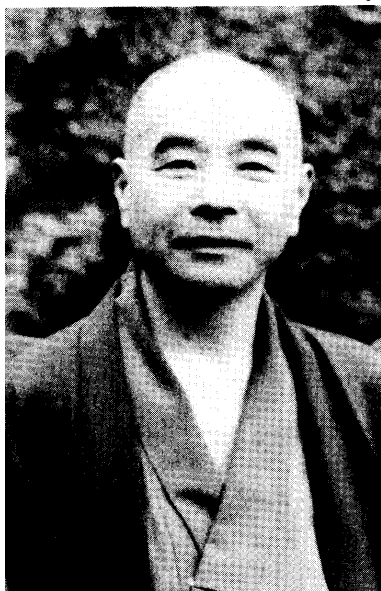
特に大正 3 年、村が大水害を受けた際、その復興の為に寝食を忘れて奮闘、村人から絶大な信頼と畏敬を受ける。

鵜坂村耕地組合を設立、自らその初代組合長となり、鵜坂一帯の耕地整理を推進、昭和 5 年亡くなるまでその職にあり、村治と地域農業の推進にその全生涯を捧げた。逝去に当って特例をもって村葬を営み、村民あげてその徳を偲び、その労に報いんことを誓ったのである。



のむらかるく 野村嘉六

鵜坂村下轡田 明治 6 年 (1874) 8 月 10 日 ~ 昭和 27 年 (1952) 1 月 17 日 享年 80 才



志を立てて上京、与えられ恵まれた才能を存分にのばすために、東京法学院 (いまの中央大学) で法律を学び、刻苦精励の功なって弁護士試験に合格、富山区裁判所の判事となった。郷里を出たのは 16 才、14 年後に法曹会に花を咲かせ錦を飾ったのである。

しかしその間兵籍一年余りのほかは、貧乏書生として屈辱にたえ、血のにじむような勉学を続け、当時の苦学生の追随を許さぬ労苦を重ねた、不遇に屈せず、才を駿らず、そして焦らぬ忍耐の二字を教訓にかち得た栄誉でもあった。

明治 39 年、官を辞して、富山市相生町で弁護士を開業、44 年、県会議員に当選、県政に力を尽したが、推されて翌年 5 月衆議院議員に当選、改進黨系の民政黨に所属、以來昭和 17 年、議場をおりるまで、大正、昭和の 30 年間、9 回連続して国政に参画したのである。長い東京の政治生活の本拠は、東京新坂町の家の一階を間借り、のちに移った麻布霞町の家もみすばらしいサラリーマン風の住宅で、うちの中は、

いつもがらんどろであったといわれている。

国政をあずかる代議士といえば、大礼服に位階勲等をほこり、議席が長ければ、交際もあがって大邸宅を構えるのがふつうであったが、嘉六は性来快淡、選挙民からは好々爺として慕われて、全力国家のために捧げるといふ人であった。これも青年嘉六の苦学の体験からにじみ出た無私無欲の処世のしからしむるところであった。

大正 13 年、加藤三派内閣のとき、商工省参与官となった。ときの商工省が鬼門としてきた証券問題を、嘉六の信念で廃案とし、事なきを得、野田商工大臣に、その政治手腕と硬骨を高く評価される結果となった。

また加藤高明の急逝のあと若槻第一次内閣のとき、藤沢商工大臣は会計士法案はじめ十件近い法律案を議会に提出した。議事が進んだ最も大事な機に及んで大臣が長患いとなり、一切の法案答弁は政務次官の嘉六がかわることとなった。誠実と忍耐をもって、そのすべてを引き受け、ひとつも残さず議会を通過させることに成功し、その才腕は閣僚以上と評された。

或は恩給法の改正案が第 37 議会に出されたとき、多数の廃兵に万斛の情を寄せた嘉六の意見は、超党派で賛成を得ることができた。

この他に臨時治水調査会委員、鉄道会議委員、文部政務次官、文教審議会委員として活躍した。

また衆議院に議席をもちながら、昭和 9 年 12 月、富山市長に推された。年俸を全額市に寄付して無給市長となり、献身的に市政の改革にあたった。

おかざきさじろう
岡崎佐次郎

鵜坂村西本郷 明治 21 年 (1888) ~ 昭和 25 年 (1950)



佐次郎は、代々御扶持人十村を勤めた「島の徳兵衛」こと「岡崎徳兵衛家」の十四代徳兵衛（順誓或は徳水ともいった）の三男として生まれた。明治 22 年兄藤十郎（十五代・善淋）の養子となり、十六代当主となった。

若い頃、京都に遊学し、草場船山の塾に入り学を修めた。また、藪の内竹翠（家元）宗匠について茶道を学び、一流の茶人の域まで達した。明治 36 年（1903 年）郡会議員に選ばれ、郡会議員も勤め、郡政に参与し地方行政に多大の貢献をした。明治 41 年、衆堂を荷って衆議院議員に選出され、能くその職費を尽くした。

改進黨に所属つねに時代意識に立脚し、特に農政について強い関心を示し、教育、民風の作興に挺身することを忘れなかった。郡教育会の会長として、学事上にも貢献した。

その他幾多の公職に在って村治の改善、民風の作興、産業の開発に特に意を注いだ。地方稀に見る政治家であり、産業開発者でもあった。

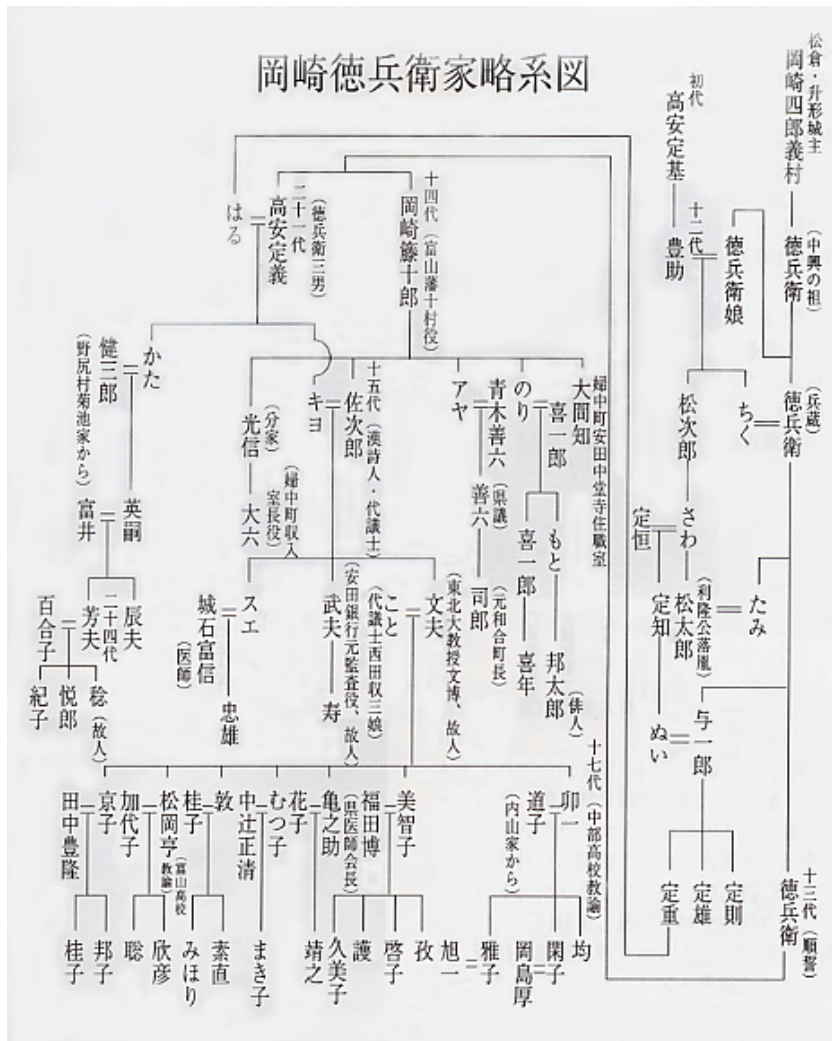
議員退職後も、中央政界とつながりを持ち、特に昭和 4 年政友会総裁、同 6 年には首相に就任した犬養毅（木堂）等と特に親交厚く幾度も文通しあった。首相若槻礼次郎とも交誼を尽くし、若槻氏自身が昭和 12 年 7 月岡崎家を訪れたこともある。

このように政治街道を歩みつづけてきた反面、藍田と号して、漢詞に対する造詣が深く、中国についての研究にもかなり深いものをもっていた。大正 15 年、中国に旅行すること二ヶ月、彼の地の墨客と交歓し、帰国後著わした旅行記に「燕鳥越鴻」がある。藍田の号は、あるいは中国の詩人王維（唐の李白、杜甫と並称された詩人で、別称を藍田荘と号した南画の始祖であり、奈良朝の阿部仲麻呂に贈った詞もある）の藍田荘から採ったのではないかとも思われる。王維の誌書画一体の境地はまた、藍田の詩境に通じた画境でなかったかともいわれている。

晩年は、悠々誌書画三昧に身を託して、風月を友とした世外の人でもあった。

咏物 風搖入二疎竹一 貌取予師汝 「風搖疎竹に入る 貌として取る」

藍田(越中古今詩鈔) 冷韻伴二孤吟一 清虚一片心 「冷韻孤吟を伴う 予れ汝を師とすることを、清虚一片の心」



若槻礼次郎（元首相・民政党総裁）岡崎邸訪問（昭和12年7月）

佐次郎主催の「漢詩の会」に出席するためという名目だったが当時の県内各界の名士が参集した。



青木善六
野村嘉六
片口安太郎
内山松与
金岡又左衛門
土岐知事
若槻礼次郎
○岡崎佐次郎
大間知事 一郎
大橋一水
奇巖

若槻礼次郎（1868～1949）

大正・昭和の政治家 大正15年第1次若槻内閣を組織、昭和5年ロンドン軍縮会議に全権として出席、昭和6年、第2次内閣を組織。

しかし、満州事変の発生などで内閣は崩壊。

たけうちせつどう
竹内拙堂

鵜坂村下轡田 明治 20 年 (1887) 12 月 20 日 ~ 昭和 44 年 (1969) 6 月 24 日



竹内彌一郎・トヨの長男として生まれる。

富山中学を卒業後、村の青年団長・農会評議員などを経て、昭和 8 年 40 才で第 7 代目の鵜坂村村長に就任、富山市近郊の農村としての地域的发展を促し、地域近代化の手始めとして隣村の速星村との合併の推進役となった。

昭和 15 年 (皇紀 2600 年) を契機に全国的に合併の気運の盛り合った時期でもあったが、昭和 16 年太平洋戦争に突入、合併の波も一頓座を来たした時ではあったが、あらゆる悪条件を克服しつつ、新婦中町の基盤をつくることに全力を傾注した。

自ら初代町長に就任して、昭和 20 年、二代目を増田清太郎に譲って、地方政界から退いた。

なかだしげひと
中田重仁

鵜坂村分田 明治 31 年 (1898) ~ 昭和 59 年 (1984) 享年 86 才



朝日村友坂中田重次郎・ジンの長男として生まれた。大正 10 年金沢医学専門学校 (現金沢大医学部) を卒えて、鵜坂村分田で開業、附近民から「なんでもこなす」全科医として慈父のように慕われた。

医院といっても普通の民家と変わりなく、たくましい行動力で、馬で、オートバイで、軽四輪で、患者の家を気軽に駆けめぐり、適格な診断と行き届いた治療で定評を得ていた。

県医師会役員としても貢献したが、終始無位無冠、地位、名声には無頓着、「医はわが天職」とただひたすら、住民の為に力の限りを尽した。

おかざきふみお
岡崎文夫

鵜坂村西本郷 明治 21 年 (1888) ~ 昭和 25 年 (1950)



島の徳兵衛こと岡崎家の十六代目の当主である。

明治 38 年、県立富山中学校を卒業し第四高等学校を経て、京都帝国大学文学部史学科に入り、東洋史を専攻し、明治 45 年卒業した。同大学院に進み、中国近世史を学び専ら中国古代史を研究した。

大正 8 年大学院生の中から抜擢され、上野育英会 (奨学資金) の資金補助を得て中国に留学し、居ること 3 年、同 10 年帰朝するや東北大学助教授となる。

大正 14 年フランス・イギリスに留学し、昭和 4 年東北大学教授となり、同 10 年文学博士、同 24 年退職した。

この間 京都大学講師、文理文学講師、龍谷大学教授などを兼任し、昭和 18 年、日本学術振興会学術部第二常置委員となった。

主な著書

魏晋南北朝通史 南北朝に放ける社会経済制度
古代史那史要 江南文化開発史 支那史概説
司馬 遷 支那史学思想の発展 古代南北朝支那社会史

昭和 25 年 3 月逝去 正四位勲二等瑞宝章が贈られた。

「岡崎文夫博士を憶う」(抜粋) 波多野太郎文博 (横浜大)

先生は温顔でお痩せになって居られ、何時も和服に袴姿といういでたちで瘦躯鶴の如き感があった。時々背筋を直し厳しい表情をされることもあり、人の研究の程度を批判されることもあり、私が聞いていてもよいかと思われるお話までふとなさったこともある。

人の意見は年令とか地位とか区別されずに、よいものをお取りあげになった。

「古代支那史要」を御執筆中、私はお手伝い申上げ、先生の御説と違う燕京学報に載った論文を持って申し上げると喜んでお取りあげになった。

(中略) 戦場でアメリカ軍の爆撃を受けていた時「この小包」が届き、部下の軍曹が持ってきてくれた。戦況そっちのけで序文に目を通すと、先生は私のようなものに心から想いを込めて文章をお書き下さった。私は思わず涙が頬を伝った。

「軍曹！俺は恐ろしくて泣いて居るのじゃないぞ。これを読め」と思わず、先生の大著の序文を突き出したのだった。思えば演習命令を受けて研究室を辞めるとき、令状を持って先生のお宅にかけつけ、「遂にこんなものがきてしまいました。お手伝いを中断して申訳ありません」と申しあげると、先生は静かにそんな風にいうものではないと宥められた。

何人も及ばぬ史眼を備えられ、浩として、烟海の如き文献を透徹した眼光によって董理され、歴史の流れを捉えられることにずばぬけた才能をお持ちであった。

しかし先生は常に謙虚な姿を持ち続けられた。(後略)

さ さ き
佐々木きよ

鵜坂村田島 明治 25 年 (1892) ~ 昭和 49 年 (1974) 享年 82 才



鵜坂村塚原松井松次郎の長女として生まれる。

大正 5 年同村田島佐々木秀次郎に嫁す。

明治 37 年小学校 (四年) を卒えて、当時鵜坂村村長だった高柳留次郎氏の推めがあつて、大日本衛生会富山支部産婆養成所 (いまの日赤富山支部) に入所、ここで 1 年 6 ヶ月産婆学・看護学を学び、明治 44 年、内務省から始めて産婆開業の免許状を取得、翌年単身上京、産科医師の許で実施指導を受け、大正 4 年、東京府から正式に看護婦免状を得る。

大正 5 年帰郷して、結婚、直ちに同地で開業、正式な産婆の資格を持つものがなかった所為もあつて、殆んど婦負郡中を手がけたといつてもいいくらいに、自転車で駆け回つた。大正 13 年、漸く郡内にも数人の有資格者が出てきたので婦負郡産婆会を結成、自らその初代会長となり分娩料金の制定など、新しい組織づくりに當つた。

昭和年代に入ると急速に制度の改革が行われるようになり、産婆の名も助産婦と改称、昭和 6 年には、富山県助産婦会が発足するようになった。

自らその推進力となり、助産婦としての地位向上とともに

に、正しい医学的見地にたった出産の意義、その知識の普及に勤めた。

昭和 26 年、富山県助産婦、看護婦、保健婦協会が発足、自らその助産婦部長に就任、母性保護の法的措置の推進に活動を展開、助産婦の傍ら、母性保護指導員、受胎調節指導員等を受け持ち積極的に活動を展開した。

その功により、大日本産婆会、富山県知事、厚生大臣から表彰を数回受け、昭和 42 年 (75 才)、生存者叙勲では県下の女性のトップをきって勲六等宝冠章を受けた。

助産婦として活動の外に、地区婦人会長、地区農協婦人部長、労働省婦人少年室相談員などのボランティア活動に積極的に参画、昭和 24 年婦人として始めて婦中町町会議員に当選、地方自治の推進にも當つた。

かわかみきいち
河上喜一

鵜坂村塚原 明治 31 年 (1898) 11 月 19 日生



上新川郡熊野村牧忠治郎・やいの長男として生まれた。
大正 10 年 3 月塚原河上家に入籍。大正 12 年鵜坂第 2 耕地整理組合の書記、大正 13 年鵜坂村役場書記に奉職。

昭和 15 年鵜坂村収入役、昭和 17 年、速星村と鵜坂村が合併して新しく婦中町が誕生するや、その町会議員に当選、常西合口組合に勤務、同 21 年婦中町助役に選任され、官選の町長から公選の町長が誕生するまでの町長公選制への移行の手續きのための助役であり、町長の職務を代行し、公選初代の浅野町長への橋渡し役を果たした。

22 年町の選挙管理委員長に推され、厳格な人柄に更なる信望を博した。26 年から 34 年まで町議会議員 (三期) を勤め、議長、郡町村議長会長など務めた。

また一方昭和 12 年に方面委員を委嘱され、23 年民生・児童委員と改称されてなお活躍、その間町及び郡の社会福祉協議会長、県社会福祉協議会理事等を兼務、福祉行政の充実に多大な貢献をした。

昭和 37 年その功により第一回自治功労表彰を受けた。

昭和 22 年には、婦中町遺族会長の重職にあり上新・婦負郡及び県常務理事の関係団体の要職を歴任、或は昭和 22 年県護国神社奉賛会常務理事、同神社の責任役員、河上治郎吉氏のあと、44 年間鵜坂神社奉賛会会長、同責任役員として活躍。

他方、昭和 45 年神通川西部土地改良区を創設、その初代理事長として尽力した。昭和 48 年(75 才)勲 5 等瑞宝章を受賞したのを始め、社会福祉功労により昭和 42 年監綬褒章、厚生大臣・全国社福協会会長・県知事より表彰を受けている。他にも農村大臣表彰等、枚挙に遑ない程である。

昭和 54 年婦中町遺族会創立 30 年記念誌を発刊、同 55 年には、神通川合口用水記念碑を建立、土地改良記念誌を発刊

昭和 60 年 11 月 9 日、婦中町名誉町民に推挙される。

昭和 60 年、婦中町善行児童生徒表彰基金を寄付し、「河上善行賞」創設。

昭和 57 年、自らの敷地を寄付することによって「婦中町社会福祉センター」を創設、昭和 59 年オープンにこぎつけた。

平成 3 年、同じく敷地を提供することにより、特別老人ホーム「喜寿園」を創設、自らその理事長に就任、平成 5 年 4 月 1 日から事業を開始させる。

平成 7 年 9 月、自らの「自分史 (小さな私の足あと)」を発刊、その際、感謝状・表彰状は 105 件に及んだ

鵜坂地区の主な家紋

家紋のおこり

家紋はそれぞれの家の標識、名字、称号の目印として用いられた図案である。家紋のおこりは平安時代に公家が自分の牛車を識別するために用いた装飾文様であるといわれる。それが鎌倉時代になると武家のあいだで戦場での旗印や幕の印として使われ戦国時代に大流行した。軍事的意味を失った江戸時代では武士が自家の威厳を示すものとして用い、しだいに装飾化していった。

それが民間でもまねられるようになり近代では紋服の礼服化にともなって一般化したのである。

木瓜紋(もつこもん)

丸に横木瓜



丸に大木瓜



石持地抜木瓜



堅木瓜



この木瓜紋が圧倒的に多い。県下での木瓜紋の比率は35%にもなり比率の高さは抜群である。

一つの紋がこれほどに多いのは他県でみられない。これは越前、朝倉氏の木瓜紋が一向衆徒に拡まったことと、紋の形が美しいこと、また木瓜紋は子孫繁栄の意味を持つ縁起の良いものであったことなどから家のルーツとはあまり関係なく、拡がったといわれている。

木瓜紋は(果紋)ともいわれ地上の鳥の巣を表したもので神社の御簾(みす)や帽額(もうこう)に多く見られることから木瓜という名がついたといわれている。

またこの木瓜紋は全国で1000種類ちかくもあるそうだが、鵜坂地区で数種類(9種類程?)でなかるうかとおもわれる。

(砂川、島坂、島崎、藤井、島田、井村、吉田、深野、赤田、小杉)

五瓜唐花(いつつうりにからばな)

織田瓜



丸に織田瓜



五瓜唐花



丸に五瓜唐花



いづれも木瓜紋の変形したものである。

(佐々木、松島、島田、松原)

沢瀉紋(おもだかもん)

立沢瀉



丸に立沢瀉



この地区で木瓜紋に次いで多いのがこの沢瀉紋である。(県下では7位ぐらい)。この沢瀉紋には葉だけのものと、葉と花を合わせた花沢瀉がある。葉の紋では1つ沢瀉から9つ沢瀉まであり、これに水を配した水沢瀉がある。鵜坂神社の御神体の台座がこの沢瀉が画かれている。

その関係からか旧鵜坂集落周辺にこの沢瀉紋が多い。

(高柳、高島、藤野、山田、田中、小林、金岡、北村、松田、板井、島田、中田、野村)

蔦紋(つたもん)

蔦



丸に鬼蔦



丸に中陰蔦



丸に蔦



蔦紋はぶどう科の植物、蔦の葉を図案化したもので家紋になったのは晩秋には楓のように紅葉する美しさが好まれたものと思われる。江戸時代には松平氏がこれを用い将軍吉宗が使用してからは家紋として広まった。市井では芸妓娼婦が蔦紋を好んで用いたが、これは姿の優雅さだけでなく蔦のつるが絡まって繁茂するさまがなじみ客として終生離れないことを願う意味に通じたといわれる。

(田中、赤池、吉野)

笹紋(ささもん)

十五枚笹丸



九枚笹丸



三枚笹



笹紋の中でもこの地区では殆どが9枚笹紋である。

そのルーツは、明確ではないが竹は文様として御袍(ごぼう)に古くから用いられた。「年中行事」「源氏物語」

などに竹丸「9枚ささ」が出てくる。鎌倉時代には「牧」として用いられやがて家紋として定着したようである。徳川時代に急激にふえて竹丸が十家ささ丸(3まい笹、9枚笹、十五まい笹など)が約180家をこえたという。

竹紋はきわめて多くのカタチがあり、バリエーションにとんでいる。

(竹内、藤井、岡崎、西田、藤堂、青山、清水、角間)

茗荷紋(みょうかもん)

抱茗荷



丸に抱茗荷



茗荷は「冥加」と同じ発音であるので縁起が良いとされており戦国時代以後天台宗の摩多羅神(またらしん)の神紋として用いられた。殆ど「抱茗荷」か「丸に抱茗荷」だがこの他には対い茗荷、違い茗荷、尻合せ茗荷、茗巴、花茗荷などあるようである。

(中田、安川)

丸に橘



五爪に橘



橘紋(たちばなもん)

橘氏は敏達天皇の皇孫の出で貴い家柄だったが藤原氏におい出されて橘氏一門はほとんど滅んでしまった。

それ以来橘紋を用いるものが非常に少なくなりました。その末孫が地方にくだり武家が多く用いたという。

(久郷、野上、野尻、藤井)

藤紋（ふじもん）

徳川時代にこの藤紋が急激にふえたといわれる。大名家では9家、旗本で160氏に及んだ。藤紋は勢力のある武将がこれを用いた例は少ないようだが公家では多かった。

但し余談だがかつての藤原氏やその出のものでも藤紋を使用していない。姓に藤のつく家（藤井、佐藤・・ など）も必ずしもこの紋を使用したようでもない

下り藤 丸に下り藤 丸に上り藤



（山崎）

梅鉢紋（うめばちもん）

梅は古くから文様として用いられた。建永年間（1206～07）藤原信実の作といわれる「北野天満宮」の絵巻物に梅の文様を描いたものが多い。菅公（菅原道実）をまつる天満宮は神紋として梅紋を用いている。加賀前田家は菅原姓に出自があり、前田家が荒子城時代から天満宮信仰があったことから前田家が梅鉢紋を用いるようになったといわれる。

後前田氏の宗支を通じて梅鉢紋であり、替え紋は用いていない。江戸時代、一般庶民は特別の事情のない限りこの梅鉢紋は使用しなかったという。

丸に梅鉢 丸に剣梅鉢



（野村、岡本）

桔梗紋（ききょうもん）

丸に桔梗 桔梗 石持地抜桔梗



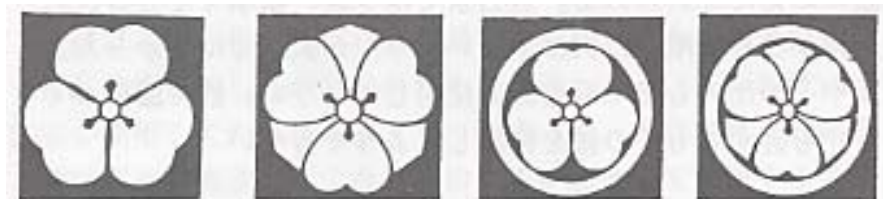
桔梗紋がはじめて出てくるのは「太平記」からである。戦国時代では明智光秀、加藤清正がこの紋を用いている。なかでも明智光秀の「水色桔梗紋」は信長を激怒させたという日くつきのものである。当地区では殆ど見受けられないから貴重な事例といえよう。
（中島）

片喰紋（かたばみもん）

片喰紋は桐紋に次いで植物紋の中で多いといわれる。形が簡素で優美なためといわれている。

3葉片のものが基本であるが、葉が一葉のものから5葉までである。江戸時代には多くの武家が家紋

酢罌紋 剣酢罌 丸に酢罌 丸に剣酢罌



としていた。この地区で見られるのは「丸に剣片喰」、「丸に片喰」である。

（宮崎、中島）

鷹の羽紋(たかのはもん)

「鷹の羽紋」は徳川時代になってから急激にふえ大名、旗本を合わせると113家という。元禄15年(1702)の四十七士の主君浅野家の家紋が有名になったがこの鷹の羽紋のカタチが

丸に違鷹の羽

丸に右重違鷹の羽



すこぶるバリエーションに富んでいる。約60種近くあって大別しても「一ツ鷹」「五枚鷹」「ちがい鷹」「よこ鷹の羽」「鷹の羽ぐるま」「羽うちわ」などがある。

(笹倉、前野)

鱗紋(うろこもん)

鱗紋は三角形の連続する鱗織文様を最小三ツ以上切り離して家紋としたもので鎌倉時代北条氏の紋として知られている。この紋は龍の鱗をかたどったといわれているが、鵜坂地区にあるものは独特の一ツ鱗でしかも鱗の中(三角の中)は切り抜きになっている。

これは「蛇のうろこ」といいつたえている。「島の徳兵衛」こと岡崎家独特のものである。

一ツ鱗

丸に三ツ鱗

三ツ鱗



柏紋(かしわもん)

檜は葉がひろく、また厚いのでものをのせるのに適している「柏」は「もてなし」の花ことばを持つのと通ずる。柏は神木として尊重されるようになり、神職の家紋として定着してきた。

三ツ柏

丸に三柏

丸に剣柏



柊紋(ひいらぎもん)

丸に抱柊



紋は全国で33種もあるそうだが、当地区では丸に抱柊紋1種である。柊はもくせい科の常緑樹で古代ではこの木を使って矛(ほこ)を作ったという。節分には悪魔退散の意味で柊の杖を竹串の鯛(いわし)の頭と一緒にさして門に立てたといわれる。

桐紋（きりもん）

丸に五三桐

五三桐



桐紋は普通花の数によって分類される。中央の茎に五つの花があり両側の花が三つあるのは「五三の桐」といいこの形式が最も多い近代的明治維新になって政府は大礼服の服装、政府発行の文書、賞盃などに多く用いるようになった。